

# 経済動向

## 九州地域の経済動向

出典：景気ウォッチャー調査（内閣府）  
 (◎良、○やや良、□不変、▲やや悪、×悪)

分野	判断	判断の理由
現状	家計動向関連	□ ・毎月の売上は、例年に比べ横ばい傾向である。時には高額単価の物も動くが、来店客数には余り変動がない(商店街)。 ○ ・8～9月は2か月連続で来店客数が前年を上回り、10月についても現在のところ前年を超えて推移している(百貨店)。 ▲ ・10月は気温の変動も多く、季節商材の売行きが思わしくない。また、景気浮揚の要素もないため客の購入動向も悪く、売上は前年と比較して大きく低下している(コンビニ)。
	企業動向関連	□ ・とにかかく魚が売れない。入荷量を増やすとかなりの数が残ってしまい、余った魚を値引きしなければ売れない状況である(一般小売店[鮮魚])。 ○ ・在庫量は多いものの、出荷量は減っている。したがって、滞留在庫が増える傾向にある。推察すると国内の需要量は飽和状態であり、見込んだほど受注がなかったと考えられる。景気が悪くなっているということではなく、良くもなっていないという状況である(輸送業)。 ○ ・受注量が上昇しているにもかかわらず、生産能力に限度があるため受注を控えている。今後も受注量はしばらく増え続けていく(一般機械器具製造業)。 ▲ ・10月については、業界の動きが最も良い時期であるが、前年度と比較すると受注関係が落ち込んでいる。従来の商品流通が変化しているか、あるいは個人消費が落ち込んでいるかが考えられる(窯業・土石製品製造業)。
	雇用関連	□ ・引き続き求人数の増加が見られ、管内の有効求倍率も高い水準で推移している(職業安定所)。 ○ ・業種業界によって差はあるが、当市周辺は都市開発の予定が多く、不動産業を中心にかなり活発な印象である(新聞社[求人広告])。
	その他の特徴コメント	○：例年よりコートの買換えを検討する客が多く、早い時期から高価格な重衣料が動き出している(衣料品専門店)。 □：肌寒くなり、来店客数は徐々に増えているが、相変わらず必要な物だけを求めるため、購入金額は低い。売上は例年と変わらず横ばいである(一般小売店[茶])。
分野	判断	判断の理由
先行き	家計動向関連	□ ・株価が急落し、貿易戦争の火が消えず情勢が読めなくなっている(通信会社)。 ○ ・今月から家具の販売もしており、家電品プラス家具で客単価を上げている。また、年末の4Kの放送開始に伴って、4Kテレビと有機ELテレビの販売は好調で、今後も伸びていくのではないかと期待している(家電量販店)。
	企業動向関連	□ ・受注活動は堅調な業者が多く、設備投資計画も前年より旺盛である。会社によっては会計上のオフバランスニーズがあり、生産性のある資産以外は賃貸借を考えており、ビル等の省エネ提案の延長線上に不動産賃貸も見え隠れしている。売買のタイミングが難しいようである(その他サービス業[物品リース])。 ▲ ・見積案件も少なく、大型物件の受注も難しい。先行きが見えず、景気が良くなる気配がない(建設業)。
	雇用関連	□ ・設備投資や輸出関連業界は活発であるものの、人手不足が更に深刻化している(人材派遣会社)。
	その他の特徴コメント	○：年末にかけて、気温も寒くなることから温かいコーヒー飲料がよく出る季節となる。また、12月はお歳暮時期に入り、進物関係の注文も多くなり、売上は若干増加すると予想される(その他専門店[コーヒー豆])。 ▲：忘年会シーズンに入るが、現在のところ12月の金曜日と土曜日の予約は増加したが、平日の予約は少ない。11～12月は1年間の中でも最も繁忙期であるが、例年と比較すると11月の予約状況は鈍く、まだまだ景気は悪い(高級レストラン)。

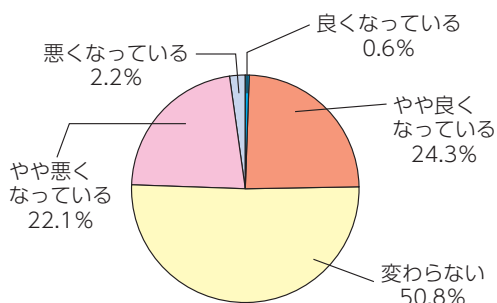
## 景気ウォッチャー調査

(平成30年10月調査) (内閣府調査)

九州における10月の現状判断DIは前月比0.9ポイント下降の49.7、先行き判断DIは前月比3.2ポイント下降の50.7となり、景気は引き続き、緩やかな回復基調にあるとみられる。

なお、全国の調査結果の評価としては「緩やかな回復基調が続いている。先行きについては、コストの上昇、通商問題の動向等に対する懸念もある一方、年末商戦等への期待がみられる。」となっている。

景気現状判断



景気先行き判断

